

2022 年度 名古屋芸術大学 入学試験問題

芸術学部芸術学科 デザイン領域 文芸・ライティングコース

一般選抜「一般入学試験 1 期」

試験科目：「文章表現テスト」

日 程：2022 年 2 月 2 日（水）

試験時間：9 時 00 分 ～ 13 時 00 分（4 時間）

配付されるもの：

- ・ 問題用紙 1 枚
- ・ 400 字詰め原稿用紙 6 枚
- ・ 下書き用 A4 コピー紙 3 枚
- ・ 参考文プリント 赤瀬川原平『優柔不断術』P10～14、

[問題]

参考文の、赤瀬川原平「いま、本当にウニでいいのか」（『優柔不断術』所収）の一編を読み、これをふまえて、この文章のなかの「ぼく」が、登場する短編を執筆してください。

[条件]

- ・ 文字数は 2000 文字程度とする。
- ・ 参考文のなかの「優柔不断」を何らかのかたちで登場させること。
- ・ 「ぼく」を異なる呼称で表記しても良いが、読者がそれを理解できるようにすること。
- ・ 読者は参考文を読んだあとに、解答の文章を読むかたちとなる。
- ・ 解答の文章の文体、一人称および二人称の叙述形式などは、参考文と合わせる必要はなく、自由とする。
- ・ 参考文が書かれたのは 1999 年であるが、社会背景などを合わせる必要はない。

いま、本当にウニでいいのか

ぼくは、自分でいうのも何だが、優柔不断の能力には恵まれている方だと思う。

世間では優柔不断というのは馬鹿にされる。決断こそが素晴らしいと賞賛されている。何かものごとをはじめようとするとき、ああしようか、こうしようかと一つ一つを丁寧に考えていると「ぐず」だといわれる。あれこれ考えたりせずに、いきなりどれか一つを「こうだ!」と決めてかかると「あの人は男らしい」といわれたりする。

たとえばご馳走を食べるときもそうで、ウニならウニにさっと迷わず箸が出るのが良しとされている。タケノコにしようか、ホーレン草のゴマ和えにしようか、それともやっぱりとウニに直行しようか、といって箸がご馳走の上空をさ迷うのは「迷い箸」といつてもっとも軽蔑される。箸の優柔不断が軽蔑されているのである。箸というのは一度これを決めたら目標物に直行するのが、最上の美德とされている。

しかし本当にそうかな、何故そうなのかな、と疑問をもつのは子供だけでなく、大人にも何人かいる。水銀の玉だってそうである。水銀というのはあの体温計のガラス管の中に入っているものだが、あのガラスを割るとナマの水銀が出てきてぶるぶるしている。掌に載せるとあつちにふらふらこつちにふらふら、ご馳走上空の迷い箸とそっくりの動きをしている。水銀の場合はご馳走ではなく、掌の手相というか皺の深みをあれこれ選んでいるのだが、生命線にしようか、知能線にしようか、運命線にしようかとふらふら揺れ動いたあげくに、どこか適当なところに落ち着くのである。でも水銀は、その動きが優柔不断だといわれることはない。水銀は重力的均衡を求めて、そういう動きをしている。人間もそれと同じで、味覚上の均衡を求めて箸が揺れ動くだけなのに、人間の場合はそれを迷い箸として馬鹿にされる。

だからぼくも、むやみに馬鹿にされたくはないので、人前では迷い箸を避けるようにしている。ウニならウニにさっと箸を出すようにしている。しかしそうしながら、頭の中は疑念でいっぱいである。いま、本当にウニでいいのか。それが最良の選択といえるだろうか。さっきは白いご飯を口に入れたから、本当は次に白菜漬を希望している。でも食卓では話題が盛り上がりつつ、みんな公的資金導入の方に関心を寄せている。だからいまのうちに何気なくウニに箸を伸ばすかどうかいいチャンスである。何しろウニは高価なので、そこに箸が向かうと目立つ。だから口の中の味覚事情は白いご飯の次に白菜漬のだけど、しかしこうしているうちに、じつは松茸に行った方がいいような気もしてきたぞ……。

まあとにかくそのように、さまざまなご馳走の選択肢があり、それだけで

なく食卓でのさまざまな話題事情や、各人の箸の進み具合といった諸問題が、目の前に、複雑な電気の配線図みたいに入り乱れて広がっているのだ。だから迷い箸は当然のことなのだけど、しかしここは世間だ、人前である、と、ぼくは自分の箸にいい聞かせて、とにかく見た目には決断的な軌線を残しながらウニならウニに直行し、それを口の中まで持ち帰る。

ぼくも世間ではそのようにしている。いくら自由と民主主義の時代でも、箸のおもむくままに迷い箸を放し飼いみたいにしていたのでは、世間でもちゃんとした評価を得られない。

「あの人は迷い箸をするのよ」

といって世間に後ろ指を指される。いったん後ろ指が刺さると、これがなかなか背中から抜けないもので、まるでダーツの標的盤みたいに、背中にびっしりと無数の後ろ指を群がらせたまま歩いている人がいるものである。後ろ指というのは本人に見えないから恐ろしい。

従ってぼくも世間では、いったん箸を持ったらウニ、さつ、鮭、さつ、大根、さつ、タクアン、さつという具合に決断的に振舞っている。でも内面は汗びっしょりだ。

ここだけの話、ここは世間ではないので、いや理論上は世間だけど、お互いの顔が直接見えるわけではないので、まあ何とかなるだろうと、こうやって優柔不断の問題を堂々と開陳し、細かい皺の一本一本を丁寧に、仔細に点検しているのである。